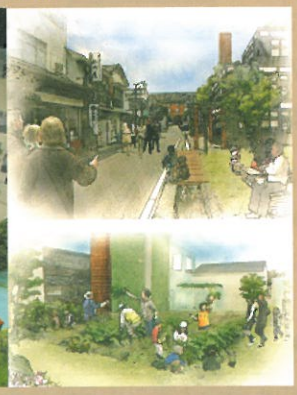
日本大学桜門建築会

2010-December
No.89

桜建会報

OKENZ

今野和仁君、高橋雄也君、永嶋竜一君の作品「めぐりバス」原寸大の前で



▲川岸梅和教授が代表のチーム作品
「Community Supported TOMIOKA」
◀岩木友佑君、桜井悠一君、松本晃一君の作品
「農業からはじまる新たなコミュニティ」

http://www.okenkai.jp/

contents

特集／日大建築山脈
［材料・施工系］山脈図&インタビュー
笠井芳夫名誉教授 × 出村克宣教授、サンジェイ・パリーク准教授——2
［歴史系］山脈図&インタビュー
山口廣名誉教授 × 片桐正夫名誉教授 × 大川三雄教授——8
研究室紹介／材料施工研究室、基礎・地盤工学研究室——13
事務局だより——14
学部ニュース——15

特集 日大建築山脈［材料・施工系］、［歴史系］

今回で４回目をとなる日大建築山脈は、［材料・施工系］と［歴史系］を取り上げた。

［材料・施工系］では、日本大学で半世紀にわたり教鞭をとり、今でも生産工学部で後進の指導にあたっている笠井芳夫先生にインタビューした。笠井先生は、戦後間もない1948年に高等工学校建築科に入学。その後ずっと日大に関わり続け98年に定年退職するまで奉職した。戦前の日大建築科の事件や事情を先生方から直接聞き、戦後の大学の雰囲気、建築材料･施工学の変遷などを、身をもって体験されてきた。聞き手として、同じ日大の材料・施工学分野を担う、工学部の出村克宣先生とサンジェイ・パリーク先生を迎え、笠井先生に往時の思い出を語っていただいた。

［歴史系］では、1996年に生産工学部を定年退職した山口廣先生、現在桜門建築会の会長である片桐正夫先生、理工学部で教鞭を執る大川三雄先生に集まっていただいた。戦後建築学科の歴史研究室を牽引した小林文次先生は、共通の恩師にあたる。小林先生の印象深いエピソード、研究室での思い出を中心に、建築ジャーナリズムとの関わりやアジア建築への広がり、建築界の中での歴史を学ぶことへの意義や可能性など、広汎な話題が展開した。

年譜

1920 20.09.01 日本大学高等工学校開校

28.04.14 日本大学工学部(現･理工学部)開校

1930 30.04 日本大学専門部工科開校

1940

47. 日本大学専門部工科が郡山に移設

49.02.21 新制大学に移行
(専門部工科は第二工学部に)

1950 50.04 短期大学部工科設置
(現・短期大学部)

59.01.10 理工学部に名称変更

1960

65.04.01 第一工学部（現・生産工学部）設置

66.01.25 第一工学部は生産工学部、第二工学部は工学部に名称変更

1970

77.12.21 海洋建築工学科設置

1980

1990

2000

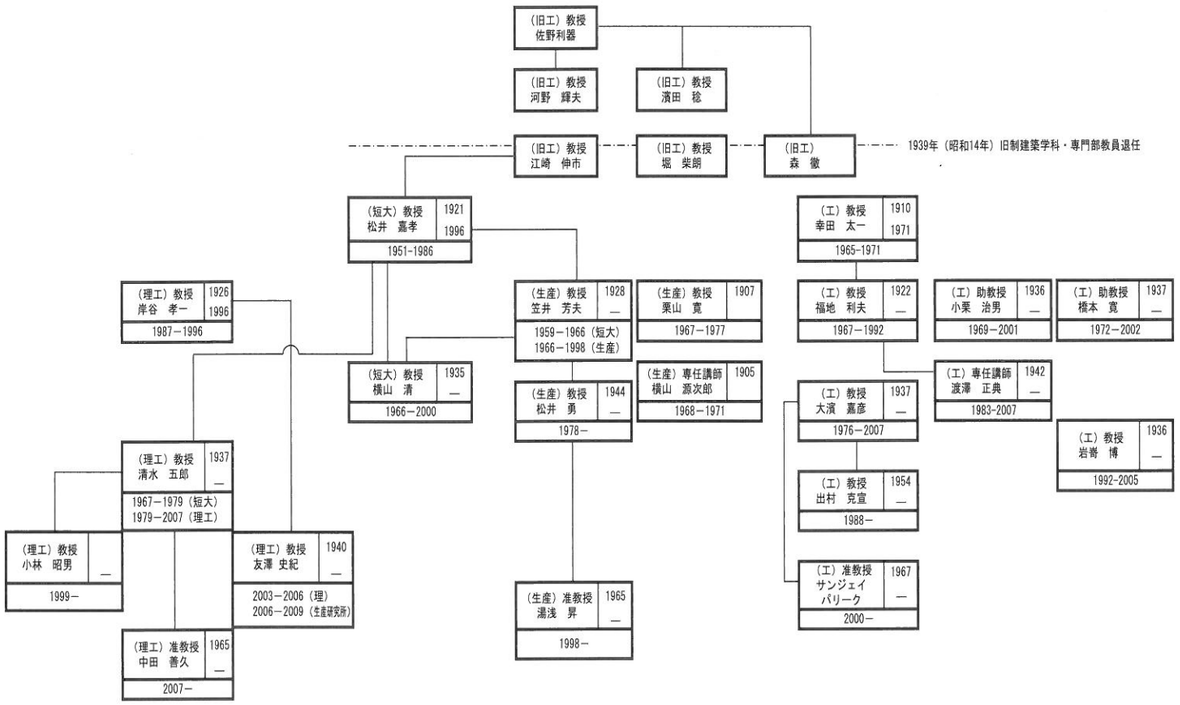
2010

インタビュー

日大の結束力が、広がりのある研究を支える

笠井芳夫名誉教授×出村克宣教授、サンジェイ・パリーク准教授

本年9月18日、理工学部駿河台校舎5号館9階の輪講室にて



佐野利器先生と戦前の日大

出村◎先生は佐野利器（としかた）先生にお会いしたことはあるんですか。

笠井◎いや会ってはいないんだ。でも佐野先生が亡くなった時は大学にいましたよ。確か、昭和30年代初めの秋ごろだったかな、部屋に斎藤謙次先生が入ってきて「今日、佐野先生のお葬式に行ってきたよ」って。斎藤先生は、なんか肩の荷を降ろしたような言い方をしていました。とにかくたいへんな先生でしたから。

パリーク◎亡くなったのは1956年(昭和31)です。戦後10年くらい経っていますね。

笠井◎享年76歳。戦後は表に顔を出さなかった。今考えると、ずいぶん早く隠居をしていたんだね。

パリーク◎日大の建築学科は佐野先生がつくられたんですよね。

笠井◎そうです。20年9月高等工学校が発足し、今の理工学部ができたのが28年。佐野先生は高等工学校や工学部、専門部工科の校長をやった。それも東大の教授と兼任です。それで日大に東大の若手の先生を送り込んだんだ。その時に教えていた先生は、みんな後で名をなした人ばかり。材料、コンクリートの第一人者の濱田稔先生もいました。そうやって始まったんですが、39年に学監の円谷弘先生が佐野先生が中国に行っている間に工学部予科を駿河台に増設して揉めたんです。佐野先生が辞表を出し、連れてきた先生もどんどん辞めてしまった。

出村◎それが建築科学生の「同盟休校」の原因ですね。

笠井◎そう。その時辞めないで、この学校をどうやってつなげていこうかと奔走したのが江崎伸市先生。教員を補充するためペンシルベニア大学を出た山戸清喜先生などを呼んだといってました。

出村◎その騒動で辞めた先生は満州の大陸科学院に行ったんですか。

笠井◎そうです。笠原敏郎先生や小野薫先生は早く戻ってきたけど、斎藤先生や加藤渉先生は戦後２年くらい旧満州にいたようです。向こうで石鹸を作ってしのいだ、なんて話を聞いたことがあります。それから忘れられないのが森徹先生。戦前は日大講師から大陸科学院に行き、戦後は満州から引き上げて建設省建築研究所の部長をつとめました。同時に日大の材料教育と研究に尽力し、多くの学生の卒業研究を指導しました。

戦後混乱期の日大建築学科

出村◎ところで先生はどうして材料の研究を始めたんですか。

笠井◎最初はね、松井嘉孝先生のところの電話番なんですよ。夜学生だった僕に声をかけてくれたのは江崎先生で、48年に高等工学校建築科に入学して、11月ころに雇いとして研究室に勤務することになった。

出村◎江崎先生が大学に残れと言われたのですか。

笠井◎いやいや、そうじゃない。最初は材料を勉強するなんて、そんな気はなかった。実は日大に入学して4月に東大の武藤清先生のところで雇員の募集があって、それに応募したんだけど、武藤先生にはお会いできず不採用でした。今にして思えば、入ったらず〜っと当時のタイガー計算機をまわすばかりの仕事だったから、入らなくてよかった。

出村◎それで江崎先生のお声かけで日大の雇いになるんですね。

笠井◎学部を出るころ松井先生がもう1年いないかって言ってくれて、給料をもらいながら実験の手伝いをしたり、モルタルの圧密強度を測ったりして、学会にも報告していたんだ。そうしたら、僕を「おもしろいやつ」と思ったんだろうね。大学院に入らないかって。それで大学院に入った。給料をもらいながらね。

Kasai Yoshio
1928年山梨県生まれ。53年新制工学部二部建築学科卒業。56年日大大学院修士課程修了、69年に「コンクリートの初期強度・初期養生に関する研究」で、工学博士を授与される。48年から建築教室の雇いとなり、57年から短期大学部助手、理工学部専任講師などを経て、66年より生産工学部に勤務。98年に定年退職。74年、「コンクリートの初期性状に関する研究」によって日本建築学会論文賞、86年、「鉄筋の直接通電加熱によるコンクリートの表層剥離工法の開発」が日本コンクリート工学協会技術賞、2009年には日本建築学会教育賞、瑞宝中綬章を受ける。10年日本建築学会名誉会員。

出村◎いいですね。給料をもらえて、勉強もできる。

笠井◎当初江崎先生がやっていたのは、ユリア樹脂接着剤の耐水性を上げるという研究で、化学合成の実験とか、いろいろとやっていました。

出村◎江崎先生の専門は計画ではなかったのですか。

笠井◎ええ、計画の先生です。戦前に『高等建築学』の20巻を共同執筆しています。

パリーク◎江崎先生は工学部にもいらしたんですよね。

笠井◎確か工学部の学監をやっていたんです。江崎先生から工学部ができた時の話を聞いたことがあります。もともとあそこは海軍の飛行場で、戦争中に国が農民から土地を取り上げたところだった。それで戦後は大蔵省が管理していて、日大に払い下げることになった。

出村◎専門部工科が47年に郡山に移設され、49年に第二工学部になりました。

笠井◎日大にしたらタダみたいな土地だったらしいのですが、土地を失った農民が杭を動かしてしまうんです。江崎先生は、それを元に戻すために週に1回ぐらい通っていたようなんです。そうやって、学校の土地を一所懸命に守ったという。

出村◎そうなんですか。

パリーク◎江崎先生は49年から工学部にきていました。

笠井◎僕は48年から研究室にいたんですが、江崎先生は佐賀の人で意志が強く、古武士の風格をもった人でしたよ。

出村◎工学部の学部長は横地伊三郎先生でしたね。

笠井◎49年2月ごろ、会頭の古田重二良さんが駿河台に来て当時の専門部学生に「郡山へ行ってくれ」と汗をかきかき説明したのを覚えてます。

出村◎47年の工学部のスタート時は、教員が19人で教授が9人、学生が464人でしたけれど、翌48年には教員が31人教授が15人学生が1、2年合わせて610人でした。他学部から出向いていただいた先生方も多かったですね。

笠井◎江崎先生がいたのは48年ころから56年ごろまでかな。

パリーク◎工学部にいたのは10年弱なんですね。

1950〜60年ごろの実験と研究

笠井◎江崎先生は、56年ごろ退職されたけど、そのころの研究室は今の3号館にあった。3階が建築学科のフロアで、江崎先生、笠原先生、市川清志先生、吉田鉄郎先生、松井先生、斎藤先生、加藤先生の部屋があった。小林文次先生の部屋には笠原文庫という本棚が並んでいた。地下には実験室があったね。

出村◎僕らもそこで学生実験をしました。

笠井◎どこの研究室だっけ。

出村◎加藤研です。研究室は違う建物でしたから。

笠井◎研究室と中廊下を隔てて製図室があってね。その横に屋外階段がついていた。夜の12時ころ、この窓をまたいでよく帰った。玄関は閉めちゃうからね。冬はビール瓶に水を入れて、ガスバーナーでお燗をするように瓶ごと温めて、湯たんぽ代わりにして寝たこともあります。

出村◎そのころの学生数って何名くらいいたのですか。

笠井◎170〜80名くらいかな。それから学生はどんどん増えていった。50年代後半はまだまだ貧しくて、斎藤先生の奥さまが千葉から芋を担いできたりしていた。そうそう、あのころは校舎の屋上から隅田川の花火が見えてね、先生や学生たちが、酒飲んでワーワーでっかい声で騒いでいたんだ。そんな時代だった。

パリーク◎先生はここで実験もされたんですよね。

笠井◎3号館の前の中庭や前の道路に砂や砂利をいっぱい干して、それをガンガンふるうんですよ。コンクリートをつくるために。そうすると、もうもうと砂煙がでる。すごい量。でも、僕に直接文句を言ってくる先生はひとりもいなかったよ。

パリーク◎先生の実験というのは・・・・。

笠井◎僕の修士論文は「コンクリートの降伏点に関する研究」でね。手動のアムスラー試験機で、供試体に1万回まで繰り返して圧縮荷重をかけて、応力度-歪度曲線（Stress Strain Curve）を測定したんです。これにマルテンス歪計を使うのですが、変形によって回転する角度を望遠鏡で覗いて目盛りを読みますから、職人芸のようなもの。この成果を論文にまとめました。とにかく、ハタ迷惑な実験だったろうけど回りは寛容だったね。実験は54年ころから始めて56年ころまでやっていた。加藤研でも、シェルをつくって破壊する実験を盛んにやっていた。

紛争時代の大学生活

出村◎日大では60年代後半に大きな学園紛争が起きました。先生はこの時はどうされていましたか。

笠井◎津田沼の学校に泊まり込んでいたときもありました。印象的なのは、ある日突然、ヘルメットをかぶって角棒をもった芸術学部の学生が20人くらい生産工学部に攻め込んで来たんです。こちらの紛争はとっくに収まっているのにね。

出村◎ええ〜。

笠井◎その時、大塚誠之学部長が対応していた。でも僕はだまって見ていた。別に学生に味方しているわけじゃないけど、いろいろな考え方があったでしょう。後から理事会で「あいつは首を切れ」と言われたそうなんですよ。

1960年ころの理工学部建築学科の先生。建築教室の旅行の時に撮影したもの。前列左3人目から木村翔先生、小林文次先生、山戸清喜先生、細谷隆二先生、井出好昭先生、後列左から西村敏雄先生、榎並昭先生、笠井芳夫先生、廣瀬力先生、ひとりおいて小野新先生、近江栄先生、ひとりおいて小林美夫先生、その前が市川清志先生、右後方が松井嘉孝先生、宮川英二先生、宗正敏先生、ひとりおいて向後豊次先生、木下茂徳先生。（写真提供／笠井芳夫）

出村◎そんなたいへんなことがあったのですか。

笠井◎でも斎藤謙次先生が僕のことをかばってくれたんで助かった。そういう話を矢代秀雄先生から聞きました。その後1年間は授業をさせてもらえなかった。それでその間、ずっと論文を書いて、ドクター論文にまとめたんです。その時はね、自宅は学校の裏門に近いので、いつもそちらを使っていたのですが、この1年間だけは表門に行ってわざわざ守衛の前を通って大学に行っていた。たいへんだった。この時に、小島重次先生や統計学科の先生たちのほとんどが、首を切られたんです。

出村◎そうでしたか。

笠井◎僕は両国にあった日大講堂の学生集会にも行っているんです。会頭の古田重二良さんや理事の斎藤先生を吊るし上げたという。この時はもう学生がエキサイトして。学生の要求は理事の退任と学生会館をつくれということだった。その騒動の次の日の朝、僕は文教政策に熱心だった若手の閣僚の中曽根康弘さんに電話したんです。

出村◎えっ、中曽根って、自民党の。

笠井◎そう、直接自宅に電話して「騒動を起こした学生の首を切ったり、犯罪者扱いのようなことはしないでくれ」って頼んだ。今考えると、どうやって電話番号を調べたんだか忘れちゃったけど、ちゃんと中曽根さん本人が電話口にでてきた。そういう時代だったんだね。

パリーク◎すごいですね。

笠井◎僕がこんな電話をかけたって

Demura Katsunori
1954年茨城県生まれ。76年理工学部建築学科卒業。79年工学研究科博士課程前期修了し、81年にThe University of Texas at Austinに留学。82年工学研究科博士課程後期課程修了（工学博士）。同年助手として工学部に勤務、2000年より教授。研究テーマは環境調和型機能性材料およびシステムの開発で、新しい材料・システムの性能表価なども行う。09年日本コンクリート工学協会賞（功労賞）受賞。

ことを公にしたのは始めてですよ。

日大の建築材料・施工学の特色

パリーク◎先生は半世紀以上建築材料・施工学に関わっていますが、スタート時はだれがいましたか。

笠井◎先ほども言いましたが材料系には、佐野先生が連れてきた東大の濱田稔先生がいました。濱田先生にずっと師事していたのが幸田太一先生なんです。幸田先生はもともと警視庁の営繕課にいて、その後品川にあった東京都材料検査所の所長を長くやっていた。その次に日本セメントの研究所に移って、それから郡山の工学部に行っている。実は僕のドクター論文は幸田先生に審査していただいている。その時にはもう結核で入院されていたんですがね。

パリーク◎ 1971 年に亡くなっています。幸田先生は 65 年に工学部に来たので、6 年しかいなかった。

笠井◎審査には病院から来てくれたんですよ。その審査も紛争中だったので、大学ではやらないんです。神楽坂あたりのホテルの一室で審査されました。幸田先生の他に斎藤先生と加藤先生が審査教授だった。審査される学生も他に 2 名くらいいた。

Sanjay PAREEK
1967 年インドのジョドプール市生まれ。86 年、インドのラジェスタン大学を卒業後、日大工学部建築学科建築化学研究室に研究生として入学、93 年工学博士を取得。民間会社で 3 年間勤務の後、96 年工学部建築学科助手、08 年より准教授。01 年インド西部地震では調査委員のひとりとして渡印。建築材料の中で、自己修復コンクリートや最新のコンクリート・ポリマー複合体の研究・開発を行っている。

パリーク◎幸田先生は工学部最初の材料系常勤の先生として研究室をもったと、聞きましたが。

笠井◎たぶんそうでしょう。幸田先生は工学部にくる前にドクターをコンクリート系でとったのですが、日大の材料系初の工学博士の学位だと思います。その後に松井先生、その次に僕がとった。

パリーク◎その後、中村伸先生が来てますね。

出村◎中村先生は非常勤ですね。東大の先生でしたか。

笠井◎いや中村先生は建研から都立大へ行ったんです。濱田先生のもとで壁材料の研究をやっていた。

出村◎幸田先生の次は福地利夫先生が来ました。

笠井◎福地先生は幸田先生が勤務していた東京都の材料検査所にいたんです。日大の材料系の特色というのは、コンクリートなんだと思うんですね。幸田先生、松井先生を始めとして、僕もそうだし、依田彰彦さん、清水五郎先生、横山清先生たちがいて、出村先生もそうでしょう。今までに僕が審査した学位論文も、ほとんどがコンクリートです。それで、コンクリートばかりじゃだめだと思って松井勇先生に仕上げ材をやったらと言ったの。そうしたら、人が材料に触った時の感触をテーマにした論文を書いて、学会賞をもらった。これは結構いい論文ですよ。それに大成建設にいる永井香織さんも仕上げ材で学位をとっている。それに寺内伸さんは仕上げ材で傑出しているね。でも、そんなに多くない。

出村◎他にどんな人がいますか。

笠井◎ OB の毛見虎雄さんの研究はユニークです。彼は僕と同期の夜学生で、戸田組（現・戸田建設）に勤め、羽田の飛行場の建設現場に行ったんだ。その時に工事報告書をガリ版でつくって社内に配ったという。そうした仕事ぶりが認められて会社の研究所に入った。そしてコンクリートのポンプ工法の研究で学会賞をもらった。この毛見さんが指導したのが現在理工学部准教授の中田善久先生だ。このふたりはコンクリートポンプのことではどこにも引けをとらない地位を築いた。

都市計画税を
建設省が来年度実施の
市街化区域に
中央・地方に審査機関
公害対策審の小委案まとまる
救済基金で医療費給付
会頭ら即時退陣認む
日大紛争、解決へ向う
検閲制度の撤廃も
区長に"違法手"
自治省が取止め通
財政審部会、大綱固める
"大衆団交"

1968 年 9 月 30 日の日大講堂「大衆団交」を報じる翌日の朝日新聞一面。同日夕刊は、佐藤栄作首相が日大の事態にショックを受け、政府が紛争に介入する姿勢を示したことを報じた

出村◎まさにコンクリート施工学の王道です。

解体がテーマのユニークな研究

笠井◎僕が長年関わっている分野では解体がある。昭和 30 年代の初めころ、大成建設の顧問だった小野薫先生が、松井嘉孝先生に「これからは解体がおもしろいよ。やってみる？」と言われてね。松井先生はやらなかったけど、それを聞いた僕が始めたんだ。いろいろ考えて、鉄筋に電気を流して熱すれば膨張してコンクリートは割れるだろうと考えた。電気科の助手をやっていた寺内君に頼んで、直流のトランスをもってきてもらった。それで直径 5cm のモルタルの中心に 5 寸釘を埋め込んで、電流を流したらパチッと割れたんだ。試験体を 10 個くらい割ったかな。いろいろ条件を変えて実験を 3 年くらいやって、これで最後と思って学会の大会で報告をした。そうしたら京大の坂静雄先生が、「面白いからやったら」と言う。

出村◎坂先生はコンクリート系材料と構造の大先生ですね。

笠井◎僕は集大成のつもりで報告したのにね。そうこうするうちに、国や建設業協などがお金を出して、解体の研究委員会をつくった。榎並昭先生が委員長で、僕が幹事。そこで解体の一手法として実験を重ねた。しばらくして前田建設の秋山さんから「あれをやりましょう」と話がきて、実用化にこぎつけたんだ。コンクリート工学協会からも表彰された

1998 年 4 月 14 日、生産工学部 5 号館 401 号室で行った笠井先生の最終講義。前の方には材料学の第一線の研究者が並び、総勢 280 名を超える聴衆を集めた。（写真提供／笠井芳夫）

し、技術認定ももらった。やり始めたころは日大の人たちに声をかけて、私的な研究会をつくったりもした。日大のいいところは電話 1 本で仲間が集まるところだよ。

出村◎いろいろな分野に、必ず人がいますからね。

笠井◎ 85 年オランダで、リレム (RILEM ／国際構造材料試験機関連合) とヨーロッパ解体業協会が共同で国際会議を開いたんだ。それに日本代表で出席したことがあります。こっちは 60 年代に始めたから、すでに RC 解体・再利用の仕様書もつくっていて、それをもっていった。そうしたら委員長が僕のところへきて、「日本で次の会議をやってくれ」と。え〜っと思ったけど、その場で断るわけにもいかなくて。建研主催、日大共催で、88 年に日大講堂で国際会議を開いた。記念すべき会議だ。

パリーク◎解体の分野はこれからますます重要になってきますね。

笠井◎そうね、すでに高層の建物を解体するという話もでてきているし。

出村◎アメリカのようにボン！と一発で壊すわけにもいかない。

笠井◎日本の都市は建物が込み合っているからね。今は 40m くらいのブームの機械もでき、建物の高さが 25m ほどなら地上から解体できるようになっているよ。

出村◎先日の鹿島はおもしろい壊し方してましたよね。

笠井◎ダルマ落しのような壊し方ね。これは鉄骨だからできるんだけど、コンクリートの大断面では難しい。高層 RC の場合は、内壁は取り外せるんだけど、躯体はどうするか。今のコンクリート鋼管充填構造や高強度コンクリートを壊すのには、新しいやり方が必要だ。

出村◎昔の圧縮強度は 21 ～ 24N ／ mm²くらいでしょう。今はその約 10 倍もあるコンクリートが使われていますよ。圧縮強度 200N ／ mm²のコンクリートをうまく壊す方法を見つけるのも材料分野の新しいテーマですね。

期待する研究領域

出村◎先生はまだ現役です。今はどんなことに興味がありますか。

笠井◎興味というか、期待する研究領域はですね、工学部がメッカになっているポリマーセメントです。このテーマで 2 回も国際会議を開いているし、あの研究をちゃんと継承していってほしいと思っているんですよ。今、ちょっと間があいているでしょう。

出村◎大濱嘉彦先生が世界の第一人者ですからね。今年からうちの助手の斎藤君が勉強を始めました。

笠井◎それはよかった。ぜひ、やってください。しかし、大濱先生のモルタルに生のエポキシ樹脂を入れるというのはヒットだったね。あれは偶然だったんですか。

出村◎エポキシの専門書には、アルカリ環境下で反応性があるということが書いてあったと思います。ふつうエポキシ樹脂と硬化剤の両方をモルタルに混ぜるとフローがどんどん下がりますが、エポキシ樹脂だけを混ぜるとそうはならない。そして硬化する。モルタルに混ぜたのは大濱先生が最初です。

笠井◎本当におもしろい話ですよね。だれがオリジナルかがとても重要。こういうことって、材料の世界にはいっぱいある。

出村◎先生、最後に若い人たちに向けてメッセージをいただけますか。

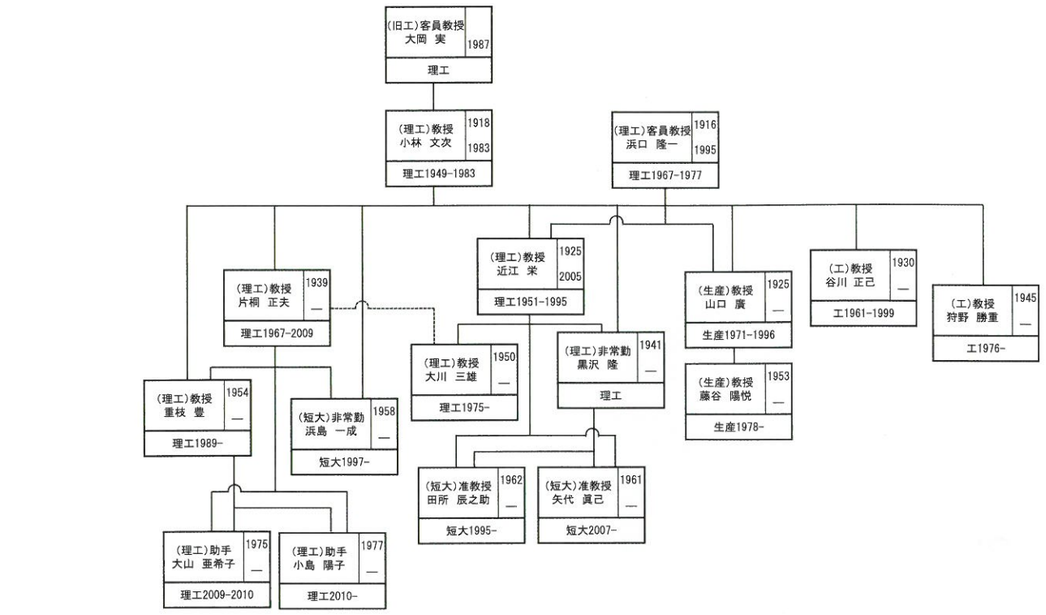
笠井◎今は、人によってずいぶん分極化していると感じています。勉強はおもしろがってやらなければだめ。そして始めたらやめないことだ。研究のテーマは、末広がりに広がるようでなければいけない。そんな展望をもってやってほしいですね。

インタビュー

小林文次先生を原点に広がった日大の建築史教育

山口廣名誉教授×片桐正夫名誉教授×大川三雄教授

2010年10月20日、日大理工学部駿河台校舎5号館7階の576B室にて



(作図協力／小島陽子助手)

国際派のザ・プロフェッサー

片桐◎戦前の日大は歴史の先生として大岡実先生がいましたが、われわれの記憶は戦後に来られた小林文次先生からですね。

大川◎小林研究室のスタッフとしては、近江栄先生や片桐先生の前に、飯田喜四郎先生と中村雄三先生がいらしたと聞いています。山口先生が小林先生の研究室に初めて行ったのは、何年くらいのときですか。

山口◎1958年編入学してからのころです。小林先生の授業でアメリカのシカゴ派の話がでた時、原書をコピーして学生に配られた。それを僕がおもしろいので全部訳しました。一緒に授業を受けていた学生に貸して欲しいと言われ渡したのですが、いつまでも返さないので聞いたら「すいません。全部ガリ版でコピーしてみんなに売った」という。（笑）

大川◎なかなか、やりますね。

山口◎それが小林先生の耳に入って名前を覚えてもらったようです。

山口◎その後、小林先生がヤッフェの『デ・スティル』（註1）の原書を貸してくださった。それを読んでいくつかレポートを書いたら、今度学会で論文報告集をつくるから、ひとつ書かないかと薦められました。

片桐◎小林先生が報告集の編集委員だったんですね。

山口◎最初に黄表紙に載せた私の論文が「デ・スティル」なんです。

大川◎小林先生に大学院進学を勧められたわけですね。

山口◎そうです。「僕のところは近代はだめだし、東大もいい先生がいないから明治へ行きなさい」と。

大川◎近代建築史の先生が少なかったですからね。

山口◎それで、明治大学の神代雄一郎先生のところへいった。昔は神代先生の研究室が、今の総評会館あたりにあって、小林先生がそこまで連れていってくださいました。

大川◎片桐先生が最初に小林先生の会われたのは何年生でしたか。

片桐◎学部の2年生の時だから、1960年ころです。印象は鮮烈でした。こういう先生がいるのかと。これぞ大学の先生だと思いました。

大川◎絵に描いたような「ザ・プロフェッサー」。

片桐◎建築学科1年生の建築概論の授業は英語でやっていましたし、建築英語という講座もつくられた。国際派だったから、以前から日本人の外国語下手を憂いていました。学生時代から海外に目を向ける必要があると意識していて、一般教養の先生と連携して授業をしていました。

大川◎理工学部全体での海外語学研修もやりましたね。

片桐◎そうそう、アメリカへ行ったり、カナダへ行ったり。一所懸命外国語に親しませようとしていました。

山口◎早稲田の国際関係学部でも講義されていたでしょう。そこでも、英語で授業をやっていたんですよ。

片桐◎そうですね。70年代はよくアメリカに行かれた。

大川◎夏はハワイ大学の客員教授で、日本建築の講義をされていた。

片桐◎著書『Japanese Architecture』を教科書にしてね。1年のうち半期ぐらいは大学におられなかった。その間、近江先生が授業代行したりして、当時の大学もおおらかでした。

ユニークだった浜口研究室の存在

大川◎小林先生の専門は歴史ですが、もう一方に建築評論家の浜口隆一先生が67年から77年だけ研究室をもっていて、建築ジャーナリズム研究所の看板をあげていました。

片桐◎まだ4号館に研究室があった時代です。僕が院生のころは浜口研究室がありました。

山口◎僕は学外でしばしばお会いしました。電話をよくかける方で、ある日突然電話があって「君ね、マクルーハンとマルクス、マンフォードはどうかね」と言う。「おもしろいですね」と答えると、「おもしろいといったのは君が最初だ」って。

大川◎浜口先生は学外に事務所をもたれていましたね。

山口◎その建物は2階建てで、1階が奥さんの浜口ミホさんの設計事務所、2階が先生のオフィスでした。仕事のやり方は、先生が外で建物を見るとその場で事務所へ電話をする。ポイントはココとココって。そうするとライターの人がメモをとっておいて、文章にするんです。ご本人はほとんど書かなかったそうです。

大川◎建築評論のさきがけ的存在です。そもそもなぜ浜口先生が日大に来たのですか。

片桐◎年齢は違いますが、小林先生の東大の同期だそうです。研究室が隣り合っていたので、浜口さんは度々小林研にお茶を飲みに来ていました。その頃、研究室によく来ていたのが、伊藤延男先生、関野克先生などで、雑談している間に話がまとまる。イコモス（国際記念物遺跡会議）の立ち上げなどは、ここの雑談が発端です。

山口◎浜口先生との最後の仕事は大

駿河台校舎5号館8階の研究室の小林文次先生。昭和53年1月ころ（『それぞれのマイルストーン』より）

（註1）H.L.C.Jafré,"De Stijl: dutch Contribution for Modern Art",1967

阪万博です。一緒に本を書かかないかとおっしゃった。

大川◎それで『万国博物語』を書かれたわけですね。

山口◎９章まで僕が書いて、最後の10章だけ浜口さんが書いた。(笑)

大川◎ユニークな存在でしたよね。今でも、私の研究室には建築ジャーナリズム研究所宛で郵便物が届きます。建築論や建築評論の先輩として近江先生や黒澤隆先生と続く流れを造られたわけですから、日大の歴史研究室に大きな影響を残している。アカデミックとクリティークが共存する体制が、この辺りから生まれていたと思います。

紛争時代の自主講座

大川◎僕が入学した69年には大学紛争が終わっていましたが、渦中はどんな状況でしたか？

片桐◎紛争は66年の春くらいから始まりました。

大川◎私が入った時はもう冷めていましたが、試験の時は、身分証明書のチェックをやっていました。

片桐◎それは僕らがやらされていた。日大の建築学科で運動をやっていた人は、ある種の工兵部隊だったから、各学部に出向いてバリケードつくった、という話も聞いた。

大川◎東大の安田講堂のバリケードの設計も、日大がやったという話ですよ。(笑) 建築科は自主講座もやっていましたよね。

片桐◎やっていましたね。

大川◎前川國男先生や磯崎新先生を呼んで授業をやったと聞きました。

山口◎僕も呼ばれましたよ。学校の中に入ったら、「今日は機動隊がきますから」と中止になったこともある。東大の自主講座にも行きました。

大川◎前川先生の自主講座は伝説になっています。先生がバリケードを乗り越えて教室に入り、開口一番「近代建築とは何だ」という質問をし、それに対して橋本功さんが「民衆のための建築」と答えたことで納得されて講義が始まったと。橋本さんは後に前川事務所に入所しました。

片桐◎大学側は、自主講座があるといっても授業を放棄するわけにいかないから、大久保の海洋会館をビルごと借りきって、２年間ほど授業をしていました。一応沈静化してお茶の水で授業を再開したけど、学生は散発的に行動を起こしてね。ある時、若色峰郎先生が計画の講義をしている中、学生が突然教室に入ってきて「われわれは～」って手を振り上げたことも。そんなごちゃごちゃした時代が後２年ほど続いたかな。

大川◎生産工学部はどうでしたか。

山口◎そのころは未だ蔵前工業高校に勤務していました。でもね、生産は周囲が広いでしょ、バリケードがつくれないのね。(笑)騒いだ人はいたけれど「バリケードを築いて闘争」という感じではなかったようです。ただ、何名かの先生方は処分を受けました。

生産工学部と工学部の歴史系研究室

片桐◎ところで生産工学部の歴史系の先生は、山口先生が初めてですか？

山口◎いや、明治大学を出られた、関建世さんが講師にきていました。

大川◎西洋建築史の方でしたね。

山口◎関さんは文化財の保存の調査などもよくやっていました。私が生産工学部に正式に着任したのは71年。小林文次先生から突然電報をもらってね。そのころ、蔵前の工業高校にいて、明治大学でドクターをとったばかりだった。

片桐◎ドクターの指導は神代雄一郎先生でしたよね。

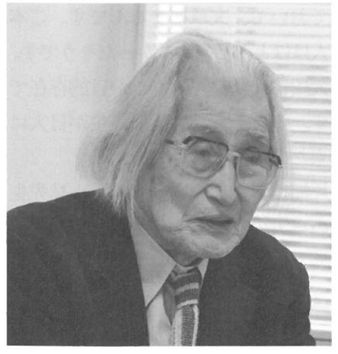
山口◎神代先生の研究室には、堀口捨己先生が戦前にドイツに行って買い集めた第一次大戦直後の出版物がおいてあって、それを一冊ずつ借りて、メモをとって返していた。それがドクター論文のもとになったんです。まだ、コピー機はありませんでしたから。

大川◎ドイツ表現派の生きた資料。

山口◎そう。論文ができて、文次先生に報告に伺ったときに、「君、大学に行きたいか」って聞かれました。「チャンスがあれば」とお返事しておいたら、いきなり電報が来たんです。書類をもって生産の若木先生のところへ行ったら、「君は高校の先生だけども、研究実績があるから助教授でいいだろう」って。関さんは、東大生産研究所の村松研に席をおいてご自分の研究をしていた。その上、明治大学OBのボスですから、けっこう忙しかったんです。それで代わりたいと。

片桐◎ひげを生やしていて、がっしりした人でね。陸軍の兵学校か、士官学校の出身でね、なんとなく軍人の雰囲気があった人でした。実はね、工学部の谷川正己先生も突然なんですよ。ぼくはその場にいたんです。横浜国大で助手をだった谷川先生はF. L. ライトに関連してかアメリカ建築のことを聞きに、しばしば研究室に来ていました。郡山で歴史の先生を探している時に、小林先生が谷川先生を呼んで「やるか」って。条件のひとつは、行く限りは腰掛では困るということ。住まいも移す。その覚悟で引き受けてくれれば、お願いしたいと。谷川先生は「喜んで！」という感じで引き受けられたんです。

大川◎そのあとに工学部には狩野先生が来られたわけですね。



Yamaguchi Hiroshi
1925年東京都生まれ。59年理工学部建築学科卒業。71年明治大学大学院博士課程修了。同年より生産工学部助教授になり、75年より教授。建築史家。87年「建築家安井武雄の研究」に対して日本建築学会賞（論文賞）受賞。著書に「自由様式への道—建築家安井武雄伝」、「日本の建築（明治・大正・昭和）６」、「ドイツ表現主義」など多数。96年退職。同年日大名誉教授。98年日本建築学会名誉会員。

アメリカ建築と保存問題

大川◎小林先生は、最初は平等院などの日本建築に興味をもち、次に古代建築の「メソポタミア建築」(註２)で学位を受け、さらに、アメリカにも関心をもたれていた。授業ではシカゴ派を中心にしたアメリカの近代建築を熱心に話されていました。

山口◎一度、高校教師時代に小林先生から国費留学の申請をしなさいって、言われたことがあります。今から思うと、小林先生はなんとか「アメリカ建築史」の後継者を育てたかったんじゃないかと思うのです。

大川◎近江先生も若い頃に、J・ボガーダスの鋳鉄建築の研究をしていました。小林先生の助言があったのだと思います。黒澤先生もシカゴ派に注目していました。

片桐◎小林先生がもうひとつ盛んに言っていたのは保存問題。留学先のアメリカで感銘を受けてきたのだと思います。アメリカは歴史が浅いから古くなくても、いいもの、歴史的な大事なものは残していく運動が盛んです。登録文化財のような緩やかな保存の制度を見習おうとした。帝国ホテルや丸の内の三菱１号館の保存などは、学会の歴史委員長として力を入れていました。

山口◎京都の中京郵便局の時は、僕が歴史委員会の幹事でした。委員長の小林先生は、京都で委員会をやろうと、京都大学の人たちを招いて、ぜひ残そうと話し合った。

片桐◎あの時、郵政省の営繕部部長か局長と同期生だったんですよね。閣議であの建物を壊すことに決まっていたのに、それを覆して、保存の方向へもっていけたと聞きました。

山口◎トップダウンで決まった。

片桐◎外壁保存の１号ですよね。

山口◎それから小林先生から直に聞いたのが、倉敷のアイビースクエアの建物。「君ね、あれいいから、学会で賞をあげたほうがいい」と。

片桐◎ああ、学会の74年度作品賞。

山口◎そう。保存再生の好例として賞を出しました。

大川◎小林先生が歴史委員長の時の功績ですよね。

片桐◎この保存は、建築歴史学という分野だけでなく、応用編というジャンルに先鞭をつけたという意味があります。あれを契機に近代建築の調査を始めたりした。

山口◎建築を見る目は確かでした。

片桐◎もともとものづくりに関心のある先生だから、専門は歴史なんだけど、建築家志望でもあった。写真はプロはだしだったし。だから保存も、街並みとか景観とか、ものづくりの視点からも評価していた。

日大の建築史の守備範囲

大川◎ふつうですと、大学では前期に日本建築、後期に西洋建築を学び、１年間で終わってしまうのに、日大理工では、その他に近代建築史の授業が早くからありました。近代建築史をカリキュラムに入れるという先鞭をつけたのが小林先生で、その後を近江先生が引き継ぎました。今では４年になると保存修復論や東洋建築史などもあります。こんな多彩な建築史のカリキュラムは他大学ではありません。元をたどれば、小林先生の幅の広さにいきつく。

山口◎そうですね。

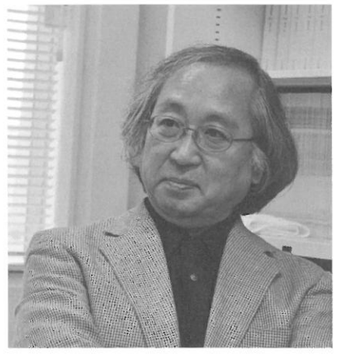
大川◎近江先生はもともと吉田鉄郎先生に私淑し、設計希望でしたが、縁があって小林研究室の助手になられ、歴史の分野に進まれました。コンペ史との出会いは、設計への想いの現れでしょうし、建築史・建築論研究室という名称にもこだわっていました。ですから、OBたちの顔触れもバラエティ豊かです。

片桐◎建築史の研究者だけではないですからね。

大川◎特徴的なのは、出版やジャーナリズムで活躍されている卒業生がたくさんいることです。歴史研出身の建築家も多く、小野正弘さん、高

昭和55年ころに行われた海外研修旅行。訪問先のひとつ、ルーマニアのブカレストで（『心たくみの哩標』より）

(註２) 小林文次著『建築の誕生：メソポタミヤにおける古拙建築の成立』(1959年 相模書房)。この論文で60年度建築学会賞（論文）を受賞する。



Okawa Mitsuo
1950年群馬県生まれ。73年理工学部建築学科卒業、75年日大大学院修士課程修了、同年より助手になり2008年より教授。建築史家。専攻は日本近代建築史。著書に「近代日本の異色建築家」、「近代和風建築－伝統を超えた世界－」、「都市建築博覧・昭和編」、「図説近代日本住宅史」など多数。

宮真介さん、山本理顕さんや椎名英三さんは、いずれも歴史研の卒業生です。黒沢先生と小野正弘さん、それに納賀雄司さんの３人には、近江研究室の中でゼミを担当してもらったこともあります。山口先生の研究室もユニークな方が多い。

山口◎国立科学博物館に行った清水慶一君はね、２年生の時にいきなり「先生、部屋掃除をしますから出入りしてもいいですか」って、押しかけて来た。

大川◎そのまま入り浸っちゃった。

山口◎そう、そのまま残ってドクター論文まで書いたんです。今大学にいる藤谷陽悦君は神奈川大学出身なんだけど、事前の打診なく突然研究室に来たんだ。

大川◎打診はなかったんですか？

山口◎ぜんぜんなかった。

大川◎重枝豊先生の研究室との関わり方も変わってました。２年生の時、小林先生の授業に感動して部屋へやってきた。それで「関西旅行を復活しましょう」と提案し、実行したのが始まりです。当時は学園紛争で途切れていましたからね。

片桐◎小林先生には「ノーサポート、ノーコントロール」という考えがあって、学生も自立した方がいいから、自分たちが企画するのならいいんじゃないのと。「自分たちでやるから」と言う当時学生だった重枝君の思いと小林先生の言葉はちょうど重なるんです。

Katagiri Masao
1940年長野県生まれ。63年第二工学部建築学科卒業。67年日大大学院修士課程修了。専攻はアジア建築史。カンボジアのアンコール遺跡国際調査団の建築部門のリーダーとして修復工事の指揮を執る。国内では文化財の修復事業や景観まちづくりの審議委員などを務める。2008年より桜建会会長。日本建築学会賞（業績賞共同受賞）、カンボジア文化功労勲章、都文化功労賞などを受賞。著書は「アジア建築の諸相」、「アンコール遺跡の建築学」など多数。

アジア建築への流れ

大川◎海外に目を向けるべきという小林先生の教えは、片桐先生や重枝先生の活動につながっていますが、きっかけはなんだったのですか。

片桐◎最初、僕は日本建築の研究を始めたんだけど、朝鮮建築をやりたいって小林先生に相談した。そうしたら、実は僕も興味があるんだと言って、資料をもってきてくれました。それで朝鮮を始めて、東南アジアへも足を延ばしていた。あのころは重枝君も、アジアを歩き回っていた。ある日、現在上智大学の学長をしている石澤良昭さんから突然電話があって、カンボジアのアンコールワットのプロジェクトを立ち上げるのに、建築部門を日大の方でやってもらえないという話になりました。最初の２年間は、重枝君にカンボジアに関わってもらって、僕が学位をとってバトンタッチした。それから重枝君が本格的にベトナムに本格的に取り組んだのです。こうして研究室のアジアの流れができました。

大川◎先生の研究室は、アジアの留学生が多いですよね。

片桐◎ 10人くらいが学位をとっていますね。

山口◎外に出ると自分の国のことがよくわかるんですよね。

片桐◎韓国の文化省に３人、日建設計の韓国部門に３人のOBがいますが、ここ数年、韓国は古い建物も残していましてね。昔は植民地時代の建物はすっかり壊してしまっていたのですが、郵政省の建物とか元の三越である新世界デパートは、ファサードを残しました。こういうのは、現地の日建設計が手掛けているようです。

昭和40年、会津のさざえ堂の実測調査で。中央下が小林先生（『それぞれのマイルストーン』より）

大川◎韓国と日大との交流は長いんですよね。

片桐◎学部長だった加藤渉先生は戦前、満州の大陸科学院にいましてね。その時に、平城やソウルにも行っていた。韓国には同級生もいて、私が韓国に行った時も、加藤先生の紹介で、偉くなっていた韓国人同級生の方々からいろいろな便宜をはかっていただいた。懐かしいですね。

＊

大川◎これから大学で人材を育てるには何が必要と思われますか。

山口◎僕は生産工学部のカリキュラムの改定をしました。学部の教養と専門、それに大学院の授業を入れ子状にしたんです。そうすると、興味が多方面につながっていくんじゃないかと思って、大改訂になった。あるいは一般教養だけでなく、その中に専門を入れていくとか。そうやって関心の幅が広げてみました。

片桐◎今は情報があふれていますが、関心の幅を広げるには、リアリティのあるものに触れる機会をつくることも必要だと考えています。

大川◎実際のモノに触れて考えさせるという点で、建築史の役割は大きいと思います。それと、建築史は建築に携わる人々の教養として機能してきましたが、近年、登録文化財制度などによって、建築史が保存修復をキーワードとして実際の街づくりや建築設計に直接的に結びつく機会が増えてきている。ぜひとも新しい可能性を探っていきたいですね。

研究室紹介

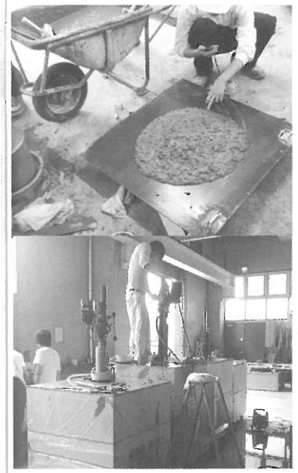
研究テーマ　**施工から見た材料学**

研究室名	材料施工研究室(中田研究室)
教員名	准教授　中田善久
キーワード	材料施工／コンクリート／供試体作製／コンクリートポンプ／コンクリート感
企業等への要望	☑共同・受託研究の要請　☑実作・試作等の協力　□研究成果の事業化等　□その他

研究概要

当研究室は、建築材料や建築施工に関して主に研究しており、特にコンクリートを対象として実験的な活動を行っています。学生が型枠を組み、コンクリートを練って供試体を作製するスタイルなので調合に関する知識や試験方法を習得することができます。これにより、施工に関する知識をもった学生を社会へ送りだしています。また、海外にも視野を広げ、ドイツにおけるコンクリートポンプの現状を視察し、国内との違いや国内への適用について調査しています。ドイツは、日本にないコンクリートポンプの機種や圧送工法に対する教育を取り入れており、今後も情報を交換し、お互いの国が発展していくような協力体制をとっています。

さらに、海外視察によりコンクリート表面の表現方法について学習し、日本におけるコンクリートを用いた建築物への適用の可能性を研究し、設計者と技術者の意見が融合した「コンクリート感」を表現できるように検討しています。



上はスランプフロー試験、下はコア供試体の採取

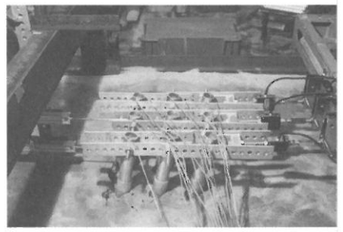
屋外で行われたコンクリートの圧送実験

連絡先◎理工学部建築学科 駿河台校舎5号館6階　TEL 03-3259-0698　中田　nakata@arch.cst.nihon-u.ac.jp

研究テーマ　**地盤工学にもとづく安全な居住環境の確保に関する研究**

地盤環境と沿岸域環境に関する研究　地盤情報の有効利用に関する研究

研究室名	基礎・地盤工学研究室(佐藤(秀)研究室)
教員名	専任講師　佐藤秀人
キーワード	擁壁／杭基礎／耐震性能／沿岸域環境／地盤環境／地盤情報
企業等への要望	☑共同・受託研究の要請　☑実作・試作等の協力　☑研究成果の事業化等 ☑その他（行政・企業との連携によるプロジェクト立案）



群杭の水平載荷試験

研究概要

本研究室が対象としている研究領域は、地盤基礎工学および環境工学です。建築物を支える地盤の力学的性質は、土の種類、場所、地下水位などによって大きく変化するため、建築物はそれぞれの地盤環境に対応した計画・設計が必要となります。そこで、基礎と地盤との相互作用を明らかにして、それらを設計に反映させるべく理論および実験の両面から研究を行っています。

また近年では、沿岸域汚染や土壌・地下水汚染などの環境問題に関する社会的意識が高まり、これらの汚染調査と、より安全な居住環境・沿岸域環境を確保するための研究を進めています。

主な研究内容として、①宅地擁壁の耐震性能に関する研究　②プラスチック由来の化学物質による沿岸域汚染調査とその対策に関する研究　③杭基礎構造に関する研究　④地盤環境問題に関する研究　⑤地盤情報処理システムに関する研究、があげられます。

韓国済州島での沿岸域汚染調査

連絡先◎理工学部海洋建築工学科　船橋校舎13号館5階 TEL 047-469-5642　佐藤　sato@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

事務局だより

熊本桜建会 平成22年度の総会を開催

新会長に選任された冨田潤一氏のあいさつ

本年8月21日、熊本交通センターホテルにて、熊本桜建会の総会を開催しました。総会には日本大学校友会熊本県支部の梨子木支部長も臨席され、ごあいさついただきました。

議事では新会長に冨田潤一氏（理工–建築昭和47年卒）が推挙され満場一致で選任されました。

会長就任に際し冨田会長は「特に何かをやらなければならない会ではないと思うが、校友として場を同じくしているわけだから、たまには会って酒でも飲んで旧交を深めていきましょう」とあいさつされました。

総会後は同日開催の日本大学校友会熊本県支部の総会に引き続き参加いたしました。

（熊本桜建会事務局／岩永一宏）

特別維持会員懇親会と第30回建築講座を同時開催

本年11月19日18時より、御茶ノ水の東京ガーデンパレスで、今年度の特別維持会員懇親会と第30回建築講座を同時開催した。

また昨年同様「桜建ふれあい2010」と称して賛助会員企業や個人会員からの作品をパネル展示し、前日本大学総長の小嶋勝衛氏や、秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された、木村翔氏、西村敏雄氏からあいさつをいただいた。出席者80名の盛会となった。

第30回建築講座は、三菱地所設計副社長の岩井光男氏が「都市再生—丸の内の街づくり」をテーマに講演。約70名の参加者が聴講した。

速報！ e-ラーニング合格率

今年度の桜建会e-ラーニング「一級建築士講座」受講生の学科試験合格率は43％であった。学科試験全体の合格率が15.1％であったことから、群を抜く合格率を達成したことになる。（日建学院調べ）

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者　氏名／卒業年／勤務　（平成22年6月26日～11月25日）10名

大倉 真人	他学科-58	長谷工コーポレーション	山中 新太郎	理工建-H4	日大理工	中村 和夫	理経工-41	中村設計
斉藤 太嘉志	他学科-58	フジタ	徳永 達紀	理工建-H5	フジタ	赤井 泰介	理工建-H8	フジタ
福田 省三	理工建-40	建文	山崎 誠子	他大学-59	日大理工	堀 靖芳	生産工-52	オリエンタル技研工業
山田 和美	理工海-63	トルカム						

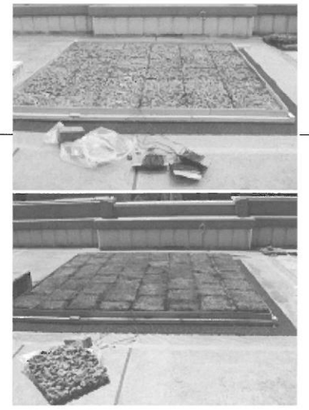
桜建会報　NO.89 2010-December
発行人　片桐正夫
編　集　桜門建築会広報委員会
〒101-8308　千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

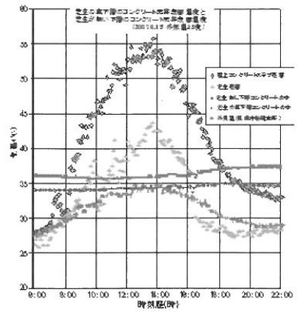
広報委員会
委員長　横内憲久(理工学部建築工学科)
副委員長　塩川博義(生産工学部建築工学科)
委員　佐藤慎也(理工学部建築学科)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子(生産工学部建築工学科)
サンジェイ・バリーク(工学部建築学科)
羽入敏樹(短期大学部建設学科)
西山麻夕美(フリー編集者)
平野香奈子(千葉県庁)
五十嵐賢博(綜建築研究所)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649　FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ http://www.okenkai.jp/
専任／星野麻衣子
非常勤／関根光枝、櫻井佐和、大木明子
業務時間／AM10:00～PM5:00（月～金）

学部ニュース

生産工　緑化の基盤材を開発し、特許を申請





川村政史教授は、屋上や外壁面などの緑化に用いることのできる新たな基盤材を開発し、「植生のための基盤材」として特許を申請した。開発した基盤材は、廃材を用いた木片チップと軽量気泡含有コンクリート板、少量のセメントおよび水を用いて製造されており、軽量で吸水性・保水性に富み、さらに適度な強度も兼ね備えている。

地球温暖化・ヒートアイランド現象が急速に進む近年において、室内の温度低下に役立つ発明である。写真は開発した基盤材（上）と屋上緑化の実験結果（下）である。

理工　建築学科トピックス

◎2月21日、横内憲久教授が企画・監修した国際シンポジウム「21世紀の都市型ライフスタイルを考える～都市の水辺に暮らす・その未来への展望～」（主催／ハイライフ研究所）が東京国際交流館で行われた。なお、シンポジウムは、3月7日NHK教育テレビ「日曜フォーラム」で放映された。

◎今野和仁君（横河研M1）、高橋雄也君（佐藤光彦研M1）、永嶋竜一君（山中研M1）の「めぐりバス」が、「地球に優しい住生活デザインコンペティション最優秀賞」（主催／地球に優しい住生活デザインコンペティション運営委員会）を受賞した。この作品は関東地区2次審査通過5作品に選ばれ、「Real Size Thinking」（原寸大で考える）の下に原寸大モデルが制作された。（表紙参照）また、土川菜々子さん（佐藤光彦研M1）、西島慧子さん（佐藤慎也研M1）、三平奏子さん（山中研M1）、茂木香織さん（今村研M1）の作品「AQURE TUBE」が「同 東京ガス賞」を受賞している。

理工　海洋建築工学科トピックス

◎11月6日に船橋校舎14号館3階1432教室で、海洋建築工学科AO入試合格者を対象としたスクーリングとあわせて「第3回海洋空間利用ミニシンポジウム」を開催。講演講師は本学科OBで海洋研究開発機構（東京海洋大学 特任准教授）の大澤弘敬氏と本学科の居駒知樹専任講師の2名で、大澤講師は「海洋エネルギー利用」、居駒講師が「地球環境問題に対する海洋建築の取組み」というテーマで講演した。参加した高校生および父母は、本学科の成果などに熱心に耳を傾けていた。

◎新宮清志教授、本間俊雄・鹿児島大学教授（海洋建築工学科卒）、田代太一・日本設計取締役（建築学科卒）は、11月27日に行った日大理工学部第4回理工学研究所講演会で、「建築・土木とその関連分野の研究と実務の最前線」のテーマのオーガナイザーを務めた。

大澤弘敬氏の講演風景

短大　トピックス

◎小石川正男短大教授は、日本私立短期大学協会創立60周年記念事業で、「短期大学教育功労賞」を文部科学大臣より表彰された。これは短期大学教育に長く従事し、短期大学教育の振興に尽力したことを評価したものである。

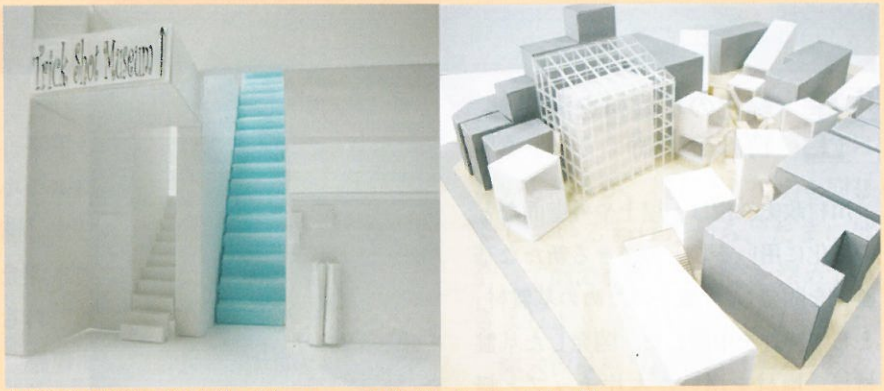
◎小石川正男短大教授、保坂裕梨短大助手、高田康史短大副手連名の「TOMIOKA HOME－市庭がつくるふるさとを想う家族物語　－」が、第12回提案競技「美しいまちをつくる、むらをつくる」（主催／日本建築学会関東支部）で優秀賞を受賞した。

◎10月30日、短期大学部のオープンカレッジ2010「ものづくり＆サイエンススクール」が船橋キャンパスで開催された。建設学科はストローで作った模型の強さを競う、「起こし絵」で住宅模型をつくってみよう、美しく響く自分だけのオルゴールをつくろう、の3つのプログラムを実施。当日は悪天候だったが、子どもから大人まで多数の参加者が訪れた。

起こし絵の模型に興味津々の子どもたち

工 東北建築学生賞で、奨励賞を受賞

10月15日、せんだいメディアテークで 開催された第13回東北建築学生賞（主催／日本建築家協会(JIA)）で、13校14学科、応募総数37作品中、佐久間皓惟君(3年生)の作品「CHARA-CTURE -Trick Shot Museum- 」が 奨励賞東北専門新聞連盟賞を受賞した。



「CHARA-CTURE – Trick Shot Museum –」のプレゼンテーションの一部

生産工 岩田研究室M１のグループが 2010年度支部共通事項日本建築学会コンペで佳作に

岩田研究室M1の大沼慈佳君、大室真悟君、須藤裕介君、松浦眞也君のグループが、2010年度支部共通事項日本建築学会設計競技「大きな自然に呼応する建築」で、佳作(10／433作品)に選ばれた。設計趣旨は「人は自然からさまざまな刺激や情報を受けて生活している。しかし、自らの住処を確保するために自然を破壊し続け、人と自然との関係は、決して良いとは言い切れないものになってしまった。『落ち葉の器』は、自然現象を建築内に取り込んだ提案である。落ち葉が堆積し、除々に土へと還ることで、壁となり屋根となっていく。日々変化していく自然を積極的に受け入れることで、人と自然と建築との間に、豊かな関係性を生み出す」というもの。

大沼慈佳君、大室真悟君、須藤裕介君、松浦眞也君たちの「大きな自然に呼応する建築」

生産工 川岸梅和教授教授が代表のチームが 第１２回提案競技で最優秀賞を受賞

川岸梅和教授を代表とするチーム(北野幸樹専任講師、創生デザイン学科研究生杉本弘文、M1稲冨龍、久保木修平、小沼俊介、鈴木健太郎、永井悠次郎)は、本年11月6日に第12回提案競技「美しくまちをつくる、むらをつくる」（主催／日本建築学会関東支部）で最優秀賞を受賞。作品は「Community Supported TOMIOKA ～塔が彩る地域資源を活かした居住者主体のまちづくり～」で、回遊性が高く歩いて暮らせるコンパクトシティを形成。人・活動・空間・時間の相互浸透・相互補完と Community が Support する魅力ある美しいまちを創出する相互浸透のデザイン・安全のデザイン・共生のデザイン・再生のデザイン等、12のデザインを提案する。（表紙参照）

理工 建築学科トピックス

◎八藤後研究室(日本大学)、日本福祉大学、積水ハウス連名の「ベビーカー及び車いす使用に安全な通路設計の研究」が、「第４回キッズデザイン賞 ユニバーサルセーフティ部門」(主催／キッズデザイン協議会)を受賞した。

◎佐藤慎也助教と「アーキニアリング・デザイン展」巡回展実行委員会(委員長／斎藤公男名誉教授)連名の「アーキニアリング・デザイン展」が、「2010年度グッドデザイン賞」(主催／日本産業デザイン振興会)を受賞した。

◎岩木友佑君(本杉研M2)、桜井悠一君(佐藤光彦研M2)、松本晃一君(山中研M2)連名の「農業からはじまる新たなコミュニティ」が、「大阪ビルディング協会創立80周年記念コンペ優秀賞」を受賞。「ビルヂング2030 —人・都市・環境 つなぐ大阪—」をテーマに提案が求められた。(表紙参照)

◎佐藤光彦研究室の「かまぼこカーテン」が、愛媛県八幡市で制作・公開された。かまぼこ板２万4000枚を使用した長さ10mのカーテンは、公園の東屋に。学生と地元市民ボランティアの手により施工が行われた。

右は丸ビル・マルキューブで行われた「アーキニアリング・デザイン展」の会場。(写真／阿野太一) 左は八幡市の八幡浜港埋立地で実際につくられた「かまぼこカーテン」